

〈一般投稿論文〉[研究論文]

ターン交替／ターン継続に関わる発話末 *though* の機能 ——イギリス英語の会話コーパスを用いて——*

山 崎 のぞみ

関西外国語大学

This study investigates the use of utterance-final *though* in informal speech in relation to turn-taking functions. Using the Spoken BNC2014, I aim to show whether and how final *though* serves a turn maintenance function and a turn-change function in conversation. The analysis reveals that it is used both for turn-holding and turn-yielding. On the one hand, turn-changes are likely to be projected when final *though* co-occurs with other utterance-final elements such as tag questions or tails (right dislocation). On the other hand, *though* serves a turn-holding function, realizing contrastive parataxis which creates expectations for reasons and further explanation to be followed.

キーワード： 発話末、*though*、ターン交替／ターン継続、Spoken BNC2014

1. はじめに

英語の話し言葉では、*though* は従属接続詞としての使用より、副詞の使用が上回る。副詞の *though* は発話頭、発話中、発話末の出現があり得るが、特に発話末での使用が1990年代に急増した (Lenker 2010: 201)。(1) は The Spoken British National Corpus 2014 (Spoken BNC2014) から採取した発話末の *though* の例である。[S 番号] は話者 ID 番号を示す。¹

* 本稿執筆にあたり、田中廣明編集委員長及び3名の査読者の先生方に、大変有益で建設的なご助言・ご指摘を数多く頂いた。貴重なご指導に心から感謝申し上げたい。本稿における不備や誤りは全て筆者の責任である。なお、本研究は JSPS 科研費 16K02907 の助成を受けたものである。

¹ 3節で述べる通り、本稿で引用する会話は Spoken BNC2014 コーパスからのものである。[S 番号] は話者 ID 番号を、引用末の括弧はテキスト ID 番号を示す。発話やターンの始まりは大文字ではなく、終わりもピリオドを用いていない。(.) は発話中に起こる1~5秒のポーズ、(...) は発話中やターン交替時の5秒を超えるポーズを示す。>> はそのターンの始まりが前のターンの終わり部分とオーバーラップしていることを示す。疑問符「?」は、形式的に明白な疑問や修辞疑問、付加疑問、明らかに上昇調で終わる陳述の発話につけられている。--ANONnameF は非特定化された女性名を表す。*though* には下線、注意を引きたい語句には波線を引いている。括弧のない「...」は、ター

- (1) S0654: you're wearing red mum that's a lucky colour
 S0653: mm yeah
 S0654: I don't think I have a red necklace though
 S0655: wow you're really lucky mum (SXPW)

従属接続詞として使われる though は、I suppose I wanted her timeless, though there is no such thing on earth. (FICT) (Biber et al. 1999: 779) のように命題間の従属的譲歩関係を明示的に示す。一方 (1) のような副詞の though は、そのような働きは薄れ、「でも」「もっとも～だが」と発話行為など談話レベルでの対比を並列的に示すつなぎの役割を顕著に示す (Lenker 2010: 212-213)。発話末で使われる副詞の though は、その発話と前の発話 ((1) では I don't think I have a red necklace と you're wearing red mum that's a lucky colour) が相反する関係であることを後から振り返って標示する。

上述のように発話末の though は、先行発話の談話上の関係を振り返って標示する談話調整機能との関連で議論されている (Barth-Weingarten and Couper-Kuhlen 2002; Lenker 2010; Haselow 2014)。しかし発話末は、発話の「周辺部」研究 (Beeching and Detges 2014; Haselow 2017; 澤田・小野寺・東泉 2017) で論じられているように、談話の異なるレベルにおいて働きを担っており、会話の組織的構造であるターンテイキング (ターン交替) と密接に関わっている。つまり、発話の周辺部という場所の性質上、発話末には「ターンを明け渡す」「後続の発話を予測する」というターン交替／ターン継続に関わる機能があると想定されている (Beeching and Detges 2014: 11)。ここでは話者が話す順番を取ってから次の話者に発言の順番が移るまでを一つのターンと考える。発話末の though の場合、(1) のように though の後でターンが別の話者に交替される場合と、以下の (2) のように話者の発話が続いてターンが維持される場合がある。

- (2) S0179: Well tough luck (.) stop confessing your happiness will be determined by your football results
 S0058: no you've heard that quote though erm some people say football is a matter of life and death (.) that's just stupid (.) it's far more important than that (.) (SMMK)

(2) の話者は though の後、erm と言い淀みながら発話を継続しており、この発話末の though はターン終了の標識として話者にも聞き手にも認識されていないようである。談話調整機能が主である発話末の though には次話者選択を行う働きはないが、(1) と (2)

ン内の後続発話の転写を筆者が省略していることを示す。

つまり、Y は X と相反する関係であることを後から振り返って標示する。下記の例 (3) で、この機能を有する *though* を確認する。

- (3) S0084: oh (.) oh (.) my skin's peeling (.) that's quite attractive (.) oh (.) I should take photos of my wounds
 S0157: you should (.) and put them on Facebook
 S0084: that's what my Mum said (.) I was like l- I'm probably not gonna do that
 S0157: really?
 S0084: but I'll I'll just take photos of the wound
 S0157: that's what a lot of people do though
 S0084: I know like --UNCLEARWORD when I when I went to I went to my knee and I had all the stitches and ... (STJD)

(3) では S0157 が、S0084 に自身が負った傷の写真をフェイスブックに載せたらと勧めますが、S0084 は「母もそう言ったが、私は載せないと言った。が、傷の写真は撮るつもりだ」と答える。それに対して S0157 は *that's what a lot of people do though* 「それ (フェイスブックに載せること) は多くの人がすることだが」と言っている。この *though* は、「載せることは多くの人がすること」(Y) と「(載せるつもりはないが) 写真を撮ることはする」(X) という先行談話の関係を、両立はするが対立的なものと標示し、話者は S0084 の考え (X) を婉曲的に批判し、掲載を促していると言える。このように発話末の *though* は、次の発話やターンに移る前に振り返って先行発話の関係を調整し直すという談話調整機能を持つ。さらに、両立可能だが相反するという二側面から発話の関係づけを行うことで、発話間の対比関係を弱めたり、逆に強調したりして、対人関係の調整や交渉も行う (山崎 2019)。

さらに発話末では、Schiffrin (1987) の「やりとりの構造 (exchange structure)」や Sacks, Schegloff and Jefferson (1974: 702-706) の「ターンテイキング組織 (turn-taking system)」がよく働く (澤田・小野寺・東泉 2017: 19-20)。周辺部研究による「左右周辺部の言語形式の使用についての仮説」(Beeching and Detges 2014: 11; Traugott 2017: 62-63) にも示されているように、発話末は、ターンを明け渡す機能や終結を表示する機能、後続談話を予測する機能といったターン交替に関連する機能を持つ。Sacks, Schegloff and Jefferson (1974: 702-706) によると、一つのターンを構成し得る言語的単位である「ターン構成単位 (turn-constructive unit, TCU)」が完了可能点に達すると、ターンの交替が起こり得る「移行関連場 (transition-relevance place, TRP)」が構成される。TRP では、聞き手は、ターンを取る、一緒にターンを終わらせる、反応を示すなどの行為を行う機会が提供される。実際に TRP でターンが交替することもあれば、交替は起こ

らず、同じ話者による新たな TCU が開始されることもある。

(2) や (3) にあるような統語的・発話行為的にまとまった発話に付けられた *though* の後は、ターン交替が起こる可能性のある場所と考えられる。実際は、(2) では話者がターンを継続しているが、(3) では *though* の後でターン交替している。発話末の *though* は、ターン交替が起こり得る発話の区切りを構成するという意味ではターン交替の構造に関わっているとは言えるが、ターン終了やターン維持の認識にはどのように関係しているのだろうか。上述のように発話末の *though* には、前の発話の対比関係を遡及的に位置づける談話調整機能があるが、この機能はターン交替の認識と関係はあるのだろうか。以下では、コーパスを用いて量的分析を試み、実際にターン交替が起きている場合と起きていない場合の頻度比較やそれぞれの生起環境の調査・分析によって、発話末 *though* のターン交替／ターン継続に関わる機能を明らかにする。

3. データと分析方法

本研究では、英語の話し言葉のデータとして、The Spoken British National Corpus 2014 (Spoken BNC2014) を用いる。Spoken BNC2014 は、2012～2016 年に収集された 668 人のイギリス英語母語話者による 1,150 万語の会話コーパスである。収められている会話は全てが日常会話であり、最近のインフォーマルな会話を観察・分析できる。以下では、Spoken BNC2014 が採用した表記方法 (Love et al. 2017; Brezina, Love and Aijmer 2018; Love 2020) に基づいて、本研究がどのように分析方法を決定したかを述べる。

「周辺部」や「発話末」の定義は定まっておらず、統一見解が未だ得られていない (澤田・小野寺・東泉 2017: 9)。本研究の分析単位は、統語面、発話行為面、韻律面から複合的に定義づけられた Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) の TCU や Haselow (2017) の ‘unit of talk’ の考え方に基づくが、Spoken BNC2014 は韻律表記がなされておらず、音声も公開されていないため、談話分析に欠かせない韻律情報を考慮に組み込むことができない難点がある。しかし一方で、コーパスに付与されたタグや話者 ID などのメタ情報を利用した量的分析を可能にし、ターン交替に関わる典型的な *though* の出現の仕方や他の発話末要素との共起パターンを明らかにすることができる。また、1990 年代に急増した (Lenker 2010: 201) 比較的新しい用法の発話末の *though* を観察・分析するには、2000 年代に話された日常会話を収めた最新コーパスが最適であると考えて、Spoken BNC2014 の利用を決定した。

したがって本研究では、テキスト情報を主体にした統語的・発話行為的側面からの判定を主軸とし、個々の分析においては、コーパスが提供している音声情報 (注 1 に示したような長短ポーズやオーバーラップ、上昇調イントネーション) を最大限活用して分析単位を決定した。発話末という際の「発話」とは基本的に、中心的メッセージ (発話の概念的

核) (澤田・小野寺・東泉 2017: 4) を有した統語的単位、あるいは、統語的に完結していても一つの発話行為や命題がある単位のこととし、概念的核の後に付加されて2節の図1のように働く *though* を発話末の *though* とする。発話頭の *though* は、等位接続詞のように働いて先行発話と後続発話の談話レベルでの対比関係を並列的に示す *though* のことを、発話中の *though* は発話が統語的に完了する前に挿入されている *though* を指す。発話末の *though* の例は (1)~(3) で示したので、発話頭と発話中の例を (4) (5) にそれぞれ挙げる。

(4) 発話頭の *though*

S0301: things have to be like that eventually

S0262: mm mm

S0301: erm (.) though that's painful it is painful (SEJT)

(5) 発話中の *though*

S0261: yeah of course yeah that's always the way that I've been thinking

S0262: yeah the reality is though is that we have to turn it into an implementation plan (SUHT)

なお Spoken BNC2014 は、[S 番号] で示される話者の ID タグとタグの間にはさまれた発話、つまり、話者が話す順番を取ってから次の話者に発言権が移るまでの発話を 'utterance' と定義しているが、本稿ではそれは「ターン」と呼んでいる。

分析にあたって第一に、コーパスから副詞 (RR とタグ付け) の *though* を計 10,077 例抽出した。このうち、明らかに *thought* の綴り間違いと思われるものと *even though* の形式で接続詞として使われているもの計 110 を手作業で除外した。結果、副詞の *though* として 9967 例を分析対象とする。次に、'utterance' つまりターンの終わりを示すタグ </u> を利用して、*though* [S 番号] / *though* (.) [S 番号] / *though* (...) [S 番号] / *though*? [S 番号] / *though*? (...) [S 番号] の連鎖を持つ *though* を 3808 件抽出した。これらは、発話末の *though* の直後かポーズ (.) (...) 後に次の話者のタグ [S 番号] が来る (3) のような「ターン末の *though*」である。

しかし、発話末の *though* のうち、ターン末の *though* はこの 3808 件が全てだと考えるのには二つの問題がある。どちらも会話のリアルタイム性や双方向性に起因する。一つ目の問題として、発話末に *though* 以外の要素、例えば (6) の *wasn't it* のような付加疑問が付いてターン交替が起こる場合は上記の連鎖には含まれない。

(6) S0198: I vaguely remember you doing it yeah

S0192: yeah that was quite a while ago though wasn't it

S0198: that was I was in like er that was er (SV28)

発話末で *though* と共起する要素には、付加疑問の他、談話標識や副詞類、テール（右方転位要素）、名前の呼びかけ、間投詞などがある。このような要素と共起する *though* も手作業でターン末ならばターン末に分類した。³ 4 節の分析では、発話末の *though* が他の発話末要素と共起する場合、ターン交替にどのように影響しているかということも考察する。

もう 1 つは、(7) のように、*though* の後に交替した話者の発話が *yeah*, *yes*, *mm* などの相づち程度のことがあり、「ターン」交替とみなしてよいのかという問題である。

(7) S0084: *she's so pretty*

S0157: *I wish I knew how to do that good go out proper eye make-up and I really do*

S0084: *it's very hard though*

S0157: *mm*

S0084: *when I went to Mac for a make-up makeover thing and they do all your make-up and then I looked in the mirror and I thought I just look like a drag queen (.) ...* (STJD)

相づちは一般的にターンを獲得する意図のない聞き手からの反応を指し (Yngve 1970; Duncan 1974)、(7) の *mm* は相づちと見なされる。英語会話の相づちは通常、ターン交替の起こり得る可能性のある発話の区切りを認識して行われるが (Haselow 2017: 240)、(7) のような *though* はターン末ではなく、話者のターンは維持されていることになる。しかし、相づちの形式的・機能的定義や分類は様々で、独立したターンと相づちの境界を明確に引くことは難しく、⁴ 次の話者の発話がターンか相づちかを自動的に判別することは不可能である。したがってここでは、ターンの終わりを示すタグを利用した量的分析を優先させ、(7) のような *though* もターン末に含めることとした。

³ この他、下記の例のように、*though* の直後で発話が（部分的に）繰り返されたり、言い換えられたりする場合がある。強調のためであることが多く、新たな命題の開始や前の発話構造の拡張ではないので、その後にターンが交替している場合は、このような *though* も例外的にターン末とみなした。

S0144: *no I just don't see the point in voting any more*

S0013: *oh I see*

S0024: *but you should vote though (.) I think you should vote*

S0144: *well if there was someone worth voting for*

(SDFL)

⁴ 近年の相づち研究では、相づちとターンを二分的に考えるのではなく、バラ言語的な相づちから 1 語～数語の相づち的表現、さらには独立した完全なターンまでを連続体としてとらえることもある (McCarthy 2003)。

4. 分析と議論

4.1. 調査結果

3 節のような分析方法のもと、自動的方法と手作業を併用して、Spoken BNC2014 の副詞の *though* (9967 例) を、発話頭・発話中・発話末 (ターン末/非ターン末) の 4 タイプに分類した。結果は表 1 の通りである。

発話における位置		発話 X, Y と <i>though</i> の出現位置 ($\leftrightarrow$ は意味の対比関係を示す)	生起数	
発話頭		$X \leftrightarrow \text{though } Y$	375 (3.8%)	
発話中		$X \leftrightarrow Y (\text{though})$	487 (4.9%)	
発話末	ターン末	$X \leftrightarrow Y \text{ though} \Rightarrow$ ターン交替 *	5224	9105 (91.4%)
	非ターン末	$X \leftrightarrow Y \text{ though} +$ ターン継続 **	3881	

* 次の話者の発話が相づち程度の場合も含む。

** 発話が継続されるが途中で遮られているものも含む。

表 1 Spoken BNC2014 における副詞の *though* (9967)

表 1 が示すように、発話における位置では、発話末の *though* が圧倒的多数を占める (91.4%)。⁵ 先行研究と同じく、会話で使われる *though* の圧倒的多数は発話末で現れることが確認された。以下の議論は、表 1 で得られたデータをもとに、焦点である発話末の *though* に関して会話の相互行為やターン交替の観点から分析する。

表 1 は、発話末の *though* (9105 例) のうち、ターン末のものは 5224 例で 57.4%、非ターン末のものは 3881 例で 42.6% を占めていることを示す。非ターン末よりターン末の *though* の頻度がやや高いが、顕著な差ではない。また 3 節で述べたように、ターン末に分類されているものの中には、次の話者の発話が相づち程度の場合もあり、それを考慮すると、厳密な意味でターンが継続される非ターン末の *though* の頻度はさらに高いと思われる。そうすると、発話末の *though* の後は、発話が継続される場合とターンが交替される場合が同程度の割合であると推測される。つまりこのデータからは、発話末の *though* の後はターンが終了しやすいか否かということについては分からない。以下、発話末 *though* が現れる談話的特徴や他の発話末要素との共起という観点から、4.2 節ではターン交替が起きる場合、4.3 節ではターン継続の場合における *though* の機能について

⁵ Spoken BNC2014 には、副詞 (RR) ではなく従属接続詞 (CS) のタグが付された *though* が 176 あり、発話頭に起きる副詞の *though* と区別があいまいなものもある。Biber et al. (1999: 891) では発話頭の *though* は全て接続詞と見なしており、定義や分類は定まっていない。しかし、たとえ 176 全てを副詞の発話頭 *though* と見なしても、表 1 における発話末 *though* の圧倒的多数は変わらない。

議論する。

4.2. ターン末の *though*—ターン交替が起きる場合

4.2 節では、発話末の *though* の後、話者のターンが継続されずにターン交替が起きているターン末の *though* について分析する。次の話者の発話は、3 節の (7) のように相づち程度の場合もあるが、多くが独立した新たな発話である。データでは、次の話者の発話の始めには、*yeah, yes, well, oh, really* など同意や不同意、意外な気持ちを表す談話標識が目立つ。発話間の対立関係の定義づけという *though* の性質上、それに関する賛成・不賛成など何らかの反応が聞き手に求められるからだろう。(8) が一例である。

- (8) S0008: --ANONnameF never plays er and I I don't think she's ever played
music on her computer
S0012: *yeah* (.) I've got tons of s- tons of music but
S0013: >>yeah we don't actually play er any of it do we?
S0012: >> we never play it though
S0008: yeah I got loads cos every time I
S0013: mm
S0008: get an old computer from like from --ANONnameF or various people
who (.) you know you look at it (SNYG)

S0012 の「音楽は山ほど持っているが」という発話に対して、S0013 がオーバーラップしながら「実際、どれも再生していないよね」とターンを取るが、S0012 はさらにそれと重なりながら *we never play it though* 「全然、再生していないけれど」と同様の内容の発言をしている。後付けされた発話末の *though* には対比的内容の不調和の程度を弱めて追加的に表す機能があり、*though* を伴う短い対比的発話の挿入のみで一つのターンを構成している例は多く見られた。(8) では、*though* が関係づける発話はどちらも S0012 による発話だが、別の話者の発話に対する対比的発話が相づち的に挿入されることもある。このような補足的発話の *though* はターン継続を示唆せず、結果的にその後、ターン交替が起こっている。

また、ターン末の *though* で目立つのは (9) のような疑問発話である。(9) では、ある男性の年齢が意外だという話から、彼の妻の年齢を尋ねる発話に話題が転換する時に *though* が使われている。*though* には、それまでの話と、今からする話の話題が異なるという「話題の転換」を示す機能がある (Barth-Weingarten and Couper-Kuhlen 2002: 349)。

- (9) S0492: but how old is he?

S0493: pu- fifty pushing fifty

S0603: >>fifty-five

S0492: is he really? how old's his missus though?

S0603: er

S0493: a bit younger yeah she's a catch man she's a stunner (S78P)

聞き手への質問は明らかにターン交替を前提とするので、疑問発話末の *though* がターン末となりやすいのは想定される。Spoken BNC2014 の表記法では句読点の使用は抑制的だが、注 1 にあるように例外として疑問符は、形式的に明白な疑問や修辞疑問、付加疑問、明らかに上昇調で終わる陳述の発話に限って用いられている。その疑問符タグを利用して、疑問符がついた発話を「疑問発話」として抽出し（付加疑問を除く）、834 例の疑問発話末の *though* がターン末と非ターン末で起こる割合を調べた。

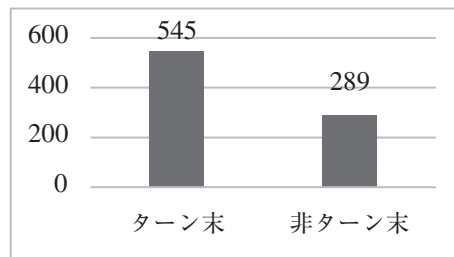


図 2 疑問発話末の *though*

図 2 は、疑問発話末の *though* は想定通り、ターン末に現れているものの方が多いことを示す。聞き手からフィードバックを引き出す疑問発話は聞き手にターンを明け渡す機能が大きいからであると考えられる。一方で図 2 は、*though* のついた疑問発話は非ターン末でも 289 例、使われていることを示すが、これについては 4.3 節で検討する。

さらに、他の発話末要素との共起が *though* の後のターン交替にどのように関わっているかについて調べる。3 節で指摘した通り、発話末の *though* は、付加疑問、テール（右方転位要素）、名前の呼びかけ、副詞など他の発話末要素と共起する場合がある。図 3 は、表 1 のターン末の *though*（5224 例）のうち、上記のような発話末の他の要素と共起する場合と共起しない場合の割合を示す。

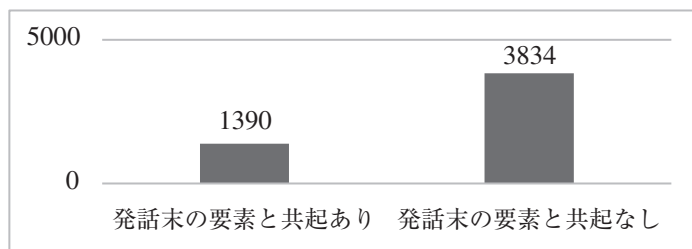


図3 ターン末の *though*

ターン末に起こる *though* は、他の発話末要素と共起がない場合の方が多いが、全体の26.6%の割合で共起が起こっている。*though* と共起する発話末の要素で特に目立つのは、(10) のような、双方向の会話に特徴的な構造である付加疑問である。

(10) S0023: so I took up cigarettes after a year or two of pipe smoking

S0022: okay

S0023: you've never smoked though have you?

S0022: well em (.) not

(SVNZ)

付加疑問は聞き手への対人関係的配慮を反映し、聞き手の注意や関心を引き付ける役割を持つ。発話末の *though* と共起する付加疑問は全体で1502例あり、ターン末で *though* と共起する場合と、非ターン末で共起する場合がある。それぞれ、どの程度の割合で生じているか調べた結果が図4である。ここでは標準的な付加疑問形式に加えて、*right?*, *yeah?*, *hey?*, *eh?*, *don't you think?*, *(do you) know what I mean?* など同様の機能を持つ表現も付加疑問とみなした。

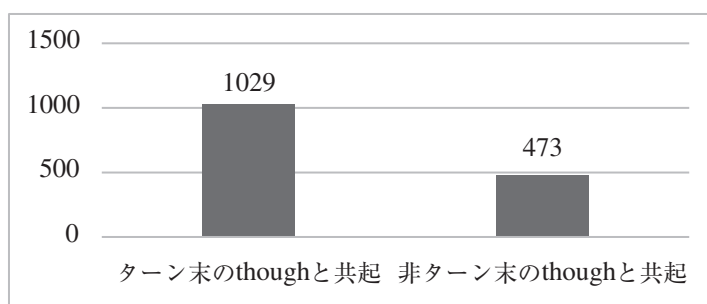
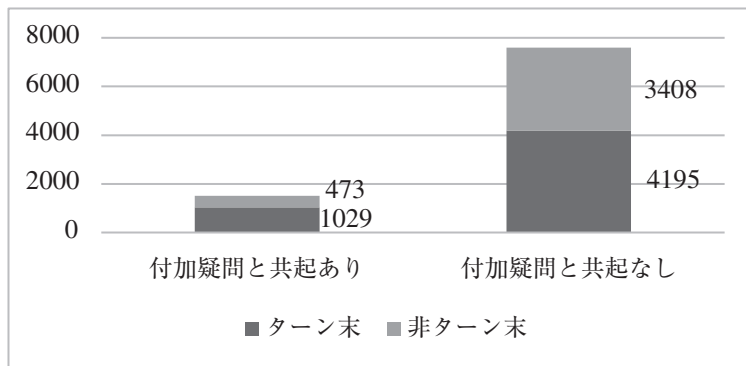


図4 発話末の *though* と共起する付加疑問

図4が示す通り、非ターン末よりターン末の *though* と共起する付加疑問の割合が高いことが分かる。

さらに図5は、付加疑問と共起する *though* (1502例) と共起しない *though* (7603例) それぞれのうち、ターン末と非ターン末がどのくらいの割合かを示す。

図 5 発話末の *though* と付加疑問の共起関係

付加疑問と共起する *though* の 68.5% (1029 例) がターン末に現れているが、付加疑問と共起しない発話末の *though* のうちターン末は 55.2% (4195 例) である。図 4 と図 5 が示すデータは、発話末の *though* は付加疑問と共起するとターン末となる可能性が高まることを示唆する。付加疑問は、Rühlemann (2007) が会話の協同構築現象 (co-construction phenomenon) の一つとして相づちなどとともに挙げており、聞き手を巻き込んで協同的に会話を進めていくためのものである。また、Spoken BNC2014 では音声が入昇調か下降調かに関わらず付加疑問には疑問符が付されているので韻律面を考慮に含めることは出来ないが、上昇調の場合は疑問と同じように相手の反応を求める機能を持ち、聞き手にターンを明け渡す機能がより強まるだろう。

最後に、*though* と共起する発話末要素として、付加疑問ほど数は多くないが、テール (右方転位要素) が付加されてターン交替が起こっている場合も多く見られる。テールとは、(11) の波線が示すように、節中の要素と同一照応の要素が再度、節末に現れる構造である。⁶

- (11) S0192: >>they're pretty good if you're thinking of buying a board game look up Fantasy Flight Games they've got a whole tonne of games and they're all really good quality and like

S0199: they're expensive though aren't they games?

S0192: they'll be about thirty quid for a board game (SJB4)

テールには、指示対象の確認・明確化機能や強意機能、さらに態度表明的・評価的な発話

⁶ 話し言葉に特徴的な右方転位構造について Carter and McCarthy (2006) や Timmis (2015) は、時間軸上を進む話し言葉の記述に適した 'tail' という用語を使っており、本稿でもテールと呼ぶ。テールには、標準的な名詞句テールと代名詞テールに加えて、I'm glad he came out to visit me though I am (S3JF) のような SV テールも含める。

に付けられて、聞き手との感情的結び付きや連帯感を作り出す対人関係的機能がある (Timmis 2015)。(11) のテールにも、確認を求める付加疑問との共起から、主語 *they* の指示対象の確認・明確化機能が見られる。さらに、「(それらのゲームは) 質は良いが、値段が高い」という評価の相反する関係を示す *though* とも共起しており、聞き手と評価を共有しようとする対人関係的機能もあると思われる。発話末の *though* と共起するテール (85 例) のうち、ターン末のものと非ターン末のものの割合を調べた結果が図 6 である。

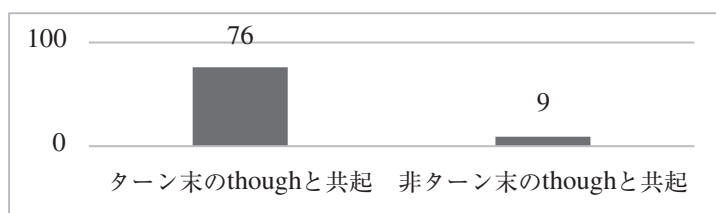


図 6 発話末の *though* と共起するテール

数は少ないが、*though* と共起するテールのほとんどがターン末で起こっている。(11) のように相手に確認を求める発話の後には通常、ターン交替が起こるだろうが、不調和を表す *though* が評価的な発話を伴いやすく、聞き手にその感情の共有を求めるテールの対人関係的機能がターン末に起こる可能性を高めているということも推察できる。

4.3. 非ターン末の *though*—ターン継続の場合

4.3 節では、発話末の *though* の後にターン交替が起きず、話者が発話を継続している非ターン末の *though* について考察する。話者はターンを保持したまま、発話末の *though* の後にどのような発話を継続しているのだろうか。新たな統語構造による発話が始められることもあれば、(12) のように統語的に拡張する語句が追加されることもある。

- (12) S0208: they were still a bit sour
 S0202: yeah
 S0208: and they're not starting to go off or anything I think I'm just gonna leave them
 S0202: yeah
 S0208: for a few more days cos they were a bit sour
 S0202: yeah that's what I like though about shopping at there because you can buy stuff that are not quite ripe yet yeah (SGHZ)

話し言葉は、Biber et al. (1999: 1068) が ‘the add-on strategy’ と呼ぶように、平均 6 語未満と言われる独立した短い節や語句が後から追加されながら線状に進む、並列的な連

鎖構造を持つ。(12) のような *though* も、語句の断片を連ねていく中でつなぎの働きをしている。さらに2節の図1の通り、*though* は先行する X と Y の対立関係を振り返って位置づけるため、話者のリアルタイムの情報処理能力を反映して *though* を伴う Y の長さは短めになる傾向がある。*though* の後から節や語句が付け加えられていくのは、簡潔な Y の意味を限定・条件付けしたり、追加説明したりする必要性によるものだろう。

上記のことは、Haselow (2014: 220-221) が *though* を伴う発話を ‘dissonance’ や ‘dispreferred activities’ と表現しているように、*though* が不調和や不同意を表すこととも関係する。つまり、会話の対人関係の配慮として、前の発話と相反する発話をした後には、(13) の *I mean ...* のようにその理由や説明が述べられることが多い。

(13) S0515: well I suppose yours was partly taken up with was it after school?

S0513: er no it was for like ten minutes in the middle of a lesson

S0515: seems like quite a good idea though I mean lots of parents can't get there in the day but when you when you can takes the pressure off the teachers for the evening too doesn't it? (...) ... (SKX6)

(13) では、S0515 が10代の子供 S0513 に「それは放課後に行われたのか」と尋ねると、「授業中の10分ほどだった」と答えたので、S0515 は「でもかなり良いやり方のようにだが」と *though* を使って不調和の発話を述べている。この発話は、「放課後ではなく授業中の少しの時間で行われた」ことの否定的含意を打ち消す肯定的発話のため、直後に *I mean ...* と続けて発話の根拠や理由（昼間に行くことで先生の夕方の仕事の負担が減るという理由）を説明している。

though の後に理由や追加説明が起こりやすいかどうかを調べるために、非ターン末の *though* (3881例) の直後に、理由や説明を示す典型的な談話標識である *I mean / because (cos) / I think (thought)* のいずれかが使われているものを数えた。

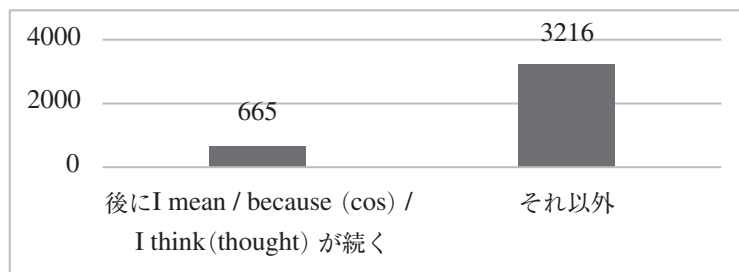


図7 非ターン末の *though*

図7は、非ターン末の *though* の5~6例に1例は、直後に *I mean / because (cos) / I think (thought)* が続くことを示す。理由や説明を導くのはこの語句だけに限らず、何も

導入語句がないこともあり得る上、上記 (12) のように統語構造の拡張を挟んで *because* などの談話標識が使われているものは数に含められていない。これらも考慮すると、「発話末の *though* + 理由・説明の追加」という流れはさらに多いと見られ、発話末の *though* が現れる特徴的な談話構造と言える。

また、*I'll tell you what though / Funny thing though* のように、これから話す内容を予告し、聞き手にターン交替を控えさせて話者の発話継続を確実にするような表現とともに *though* が使われることもある。このような表現は談話に ‘conversational space’ (Schiffrin 1987: 16) と言われる会話時間を生み出し、その間、話者に話題を管理する権限を与える。発話末につけられた *though* は話題の転換を示す (Barth-Weingarten and Couper-Kuhlen 2002: 349)。(14) が一例である。

- (14) S0222: like erm (.) can you split the money that you earn because we're all the subjects of your money-earning?

S0202: erm no

S0222: damn

S0202: I'm not giving you any money

S0222: it was worth trying

S0202: it was worth trying I'll tell you what I can do though I can email the woman and find out if there are any other if they need any more freelancers because ... (SY2Z)

(14) の S0202 による *I'll tell you what I can do though* は、「お金は折半しない」というそれまでの主張とは相反する話題（自分ができること）について話すことを予告しており、発話の継続だけでなく話題の転換も示している。以上、(12)～(14) に見られるような発話末の *though* には、その並列的つながりや談話調整の働きと関連して、話者の発話継続を予測させてターン維持を示唆する機能が見られる。

また、4.2 節の図 2 では、疑問発話末の *though* は非ターン末でも 289 例、使われていることが示されていた。聞き手に応答を求める疑問発話に付けられた *though* の後も話者が発話を継続している一例が (15) である。

- (15) S0231: if someone's got a debt on there already you wanna

S0198: yeah

S0231: make sure that

S0198: that it's paid by the company

S0231: well yeah say look (.) I've just moved in (.) that debt ain't mine

S0198: how do you get the debt on it though? cos it's does the electricity

just cut off when you've run out of money? (S6ZU)

(14) と同じく (15) の *though* も話題の転換を示している。ここでは、引っ越してきたばかりの S0231 が負わされている光熱費の借金が不当であるという話から、一般的に光熱費の借金滞納はどのように起こるのかという話に移っている。289 例の中には (15) のように疑問発話の後に *cos* が続いているものが多く見られた。これは「～と私が聞くのは」という意味の語用論的な *because* 節で、なぜ、前の発話内容と不調和なことを問うという発話行為を行ったのかを説明するものである。*cos* などの談話標識がなくとも、同様の理由・説明を行う発話が続いている場合もあった。上記で見た「発話末の *though* + 理由・説明の追加」という特徴的な談話構造がここでも見られる。

さらに 4.2 節の図 4 と図 5 では、付加疑問と共起しているが、ターン交替が起らず発話が継続される非ターン末の *though* が 473 例あることが示されていた。以下が一例である。

- (16) S0041: he's actually lost the plot
 S0084: he's actually officially gone mad
 S0041: so
 S0084: there's nothing you can do about it though is there? You know you
 can say we think you're crazy (.) he's like no I'm not crazy (.) I'm
 just you know just like her (SXWH)

S0084 は「彼は正真正銘、おかしくなった」と言い、それに対立する発話として「できることは何もないけれどね」と続いている。話者は発話末の *though* と付加疑問の後、さらにターンを継続して、その発話内容についての追加説明を行っている。付加疑問と共起していても、*though* が表す不調和の関係を説明する必要性という要因が強く働いて、ターンは明け渡されず発話が継続されていると考えられる。

最後に 4 節の分析結果をまとめる。*though* がターン末で使われる発話には、補足的・相づち的に不調和の発話が挿入される場合や、疑問発話の場合が見られた。さらに発話末の *though* は、付加疑問やテールと共起すると直後にターン交替が起こる可能性が高まることが分かった。一方、ターンが継続される非ターン末の *though* の後には、端的に述べられた対比的発話の理由や追加説明が続くという談話構造が目立った。

5. おわりに

本稿は、Spoken BNC2014 を利用して、発話末の *though* とターン交替／ターン継続機能との関連を分析した。第一に、疑問発話や挿入的・相づち的発話など相手にフィード

バックを求める不調和の発話の場合、*though* が結果的にターン交替の場所となっており、ターン終了の標示機能が推察される。さらに *though* は、他の発話末要素の相互行為的な役割と連動することでターン交替をもたらす可能性が高まることが示唆された。一方で、対比・不調和の談話関係を表す *though* の談話調整機能が、*though* のターン維持機能に大きく関わっていることが分かった。*though* が持つこのような発話継続志向は、*though* が表す対比や不調和について更なる説明を要する対人関係の配慮や語用論的要因が関連していると考えられる。本研究は、発話末 *though* が異なる談話レベルにおいて多層的に絡み合っていることを示し、発話末という場所が持つ一般的機能の説明の一助になると考えられる。また、本研究が明らかにした、他の発話末要素との共起がターン交替にもたらす影響は、発話末要素の連鎖構造と機能の関係の解明につながるものである。

参考文献

- Aijmer, K. 2013. *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Aijmer, K. 2016. "Pragmatic Markers as Constructions. The Case of Anyway." In Kaltenböck, G., E. Keizer and A. Lohmann (eds.) *Outside the Clause: Form and Function of Extra-clausal Constituents*, 29–57. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Barth-Weingarten, D. and E. Couper-Kuhlen. 2002. "On the Development of Final *Though*: A Case of Grammaticalization?" In Wischer, I. and G. Diewald (eds.) *New Reflections on Grammaticalization*, 345–361. Amsterdam: John Benjamins.
- Beeching, K. and U. Detges. 2014. "Introduction." In Beeching, K. and U. Detges (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, 1–23. Leiden and Boston: Brill.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan (eds.) 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education.
- Brezina, V., R. Love and K. Aijmer (eds.) 2018. *Corpus Approaches to Contemporary British Speech: Sociolinguistic Studies of the Spoken BNC2014*. New York: Routledge.
- Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide: Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duncan, S. 1974. "On the Structure of Speaker-auditor Interaction during Speaking Turns." *Language Society* 2, 161–180.
- Haselow, A. 2014. "Sequentiality in Dialogue as a Trigger for Grammaticalization." In Hancil, S. and E. König (eds.) *Grammaticalization: Theory and Data*, 203–233. Amsterdam: John Benjamins.
- Haselow, A. 2017. *Spontaneous Spoken English: An Integrated Approach to the Emergent Grammar of Speech*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kaltenböck, G., E. Keizer and A. Lohmann. 2016. *Outside the Clause: Form and Function*

- of *Extra-clausal Constituents*. Amsterdam: John Benjamins.
- Lenker, U. 2010. *Argument and Rhetoric: Adverbial Connectors in the History of English*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Love, R. 2020. *Overcoming Challenges in Corpus Construction: The Spoken British National Corpus 2014*. New York and London: Routledge.
- Love, R., C. Dembry, A. Hardie, V. Brezina and T. McEnery. 2017. "The Spoken BNC2014: Designing and Building a Spoken Corpus of Everyday Conversations." *International Journal of Corpus Linguistics* 22(3), 319–344.
- McCarthy, M. 2003. "Talking Back: 'Small' Interactional Response Tokens in Everyday Conversation." *Research on Language and Social Interaction* 36(1), 33–63.
- 小野寺典子. 2014. 「談話標識の文法化をめぐる議論と『周辺部』という考え方」、金水敏・高田博行・椎名美智(編)『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為』、3–27、東京：ひつじ書房。
- Rühlemann, C. 2007. *Conversation in Context: A Corpus-driven Approach*. London: Continuum.
- Sacks, H., E. A. Schegloff and G. Jefferson. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation." *Language* 50(4), 696–735.
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子. 2017. 「周辺部研究の基礎知識」、小野寺典子(編)『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』、3–51、東京：ひつじ書房。
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, L. 1999. "Discourse Markers." *Lingua* 107, 227–265.
- Timmis, I. 2015. "Tails." In Aijmer, K. and C. Rühlemann (eds.) *Corpus Pragmatics: A Handbook*, 304–327. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E. C. 2014. "On the Function of the Epistemic Adverbs *Surely* and *No Doubt* at the Left and Right Peripheries of the Clause." In Beeching, K. and U. Detges (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, 72–91. Leiden and Boston: Brill.
- Traugott, E. C. 2016. "On the Rise of Types of Clause-final Pragmatic Markers in English." *Journal of Historical Pragmatics* 17(1), 26–54.
- Traugott, E. C. 2017. "A Constructional Exploration into 'Clausal Periphery' and the Pragmatic Markers that Occur There." In 小野寺典子(編)『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』、55–73、東京：ひつじ書房。
- 山崎のぞみ. 2019. 「発話末の *though* が表す対人関係の意味」、現代英語談話会(編)『英語のエッセンス』、77–87、大阪：大阪教育図書。
- Yngve, V. H. 1970. "On Getting a Word in Edgewise." *Papers from the Sixth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*, 567–578.